
二五 文語と口語

二四 文體と口語

二五七

文語口語に
對する誤解

國語に於て口語と稱するは、吾人の今日日常談話に使用しつゝある言語を指し、文語とは中古時代の語法に基づける一種の文體を指すのである。世人は動もすれば文語とは紙の上に綴る場合の言葉であるやうに解釋して居るが、吾人が紙上に思想を述べようとする場合には、必ずしも所謂文語にのみ頼るを要せず、いくらか口語を以て書き表はすことが出来る。世人をして文とは「せざるべからず」「せすんばあらず」流のものでなければならぬやうに考へしむるに至つたのは、徳川時代國學勃興の際學者が濫りに中古文を尊崇し、口語を卑しんだ結果、それが習慣性となつて今日にまでも累して居るのである。今日の立場からいへば所謂文語も口語も共に文である。中古文を以て文語と稱し、之を以て口語なる名稱に對立せしめんとするの不可なるは、之を以ても知るべしである。併しながら、今日之に代るべき適當なる他の名稱を發見しかねるので、暫く從來の慣用に從つて中古文を以て文語と稱することとする。唯此の兩語の内容の相對立し得ざる所以を知れば足るのである。

文語と口語
との分離

言語發生の當び初及其の後餘り遠ざらざる期間に於ては、文語と口語との區別

は勿論存することなく、口語即ち文語であつたのである。然るに紙の上に書き綴られた口語は、一方文字其のものの力によつて其の變化を拘束せられ、比較的以前の姿を保存する傾向あるに反し、口によつて發せられる口語は發音の絶えずる自然的變化によつて以前の姿を漸次變へて行く。即ち紙の上に綴られた口語は依然として以前の姿を保存して居るのに、口による口語は遠慮なく發展を續けて行く。而して數十年乃至數百年の歲月を経たる後、兩者を比較し見る時は、其の結果に於て著しい間隔の生ぜるを發見し得るのである。之が所謂文語口語の發生する動機をなすのである。

暫く之を國語に於ける文語、口語の發達に就いて觀察しように、國語發生の悠遠なる時代の問題は別とし、神武天皇以後程遠からぬ時代の國語は比較的、日本固有の言語を代表して居た。然るに應神天皇の十六年百濟より王仁來朝し、漢籍を我が國に傳へしより、我が國語も多少漢語の影響を蒙つた。殊に文語の方面に於ては漢文的修飾語が非常に増加し、口語との間に少なからざる溝渠を生ぜしむるに至つた。此等は國語に於ける第一回の變化とも稱することが出來よう。其

の後奈良朝時代より平安朝時代に至る間にもそれ／＼の變化はあつたが、平安朝時代に於ける變化は特に著しいものがあつた。蓋し此の時代に於ては國文學が大いに發達し、人々皆文を練り和歌を詠することによりのみ思を凝し、文語に著しい洗鍊が加へられた結果、さらぬだに固定的性質を有する文語は益々固定し、一方口語が絶間なく變化し行く現象と相伴つて、兩者の間に顯著なる隔りを生ずるに至つたのである。即ち此の時代に至つては音便なる現象が盛んに起り、村上天皇の天暦年間頃よりは假名遣も亂れ始め、前九年、後三年の役及び保元平治等の亂後は動詞の活用にも變化を生ずるに至つた。其の後鎌倉時代より應仁の亂を経るに及び、文語と口語との差が愈々甚だしくなつたが、織田、豐臣、江戸時代にはさ程急激な變化が無かつたやうである。

世間では今尙ほ文語を以て高尚優雅なるもの、口語を以て鄙俗蕪雜なるものと考へて居るものが多い。即ち文語を目して雅語といひ、口語を目して俗語と稱するが如きは其の證である。朝鮮に於ては、外國語たる支那語を華音、華語などと尊稱するに對して、自國語を俗語、諺語、國諺、等と貶稱するので、我が國の文語對口

語の關係とは稍々其の趣を異にして居るが、言語其の物の生命を沒却する点に於ては、遙かに國語以上である。抑文語を以て高尚なるもの、口語を以て鄙俗なるものと考へることが、既に根本的に間違つて居る。元來文なるものは吾人の思想を最も正直に精確に言ひあらはし得るものを以て上乘とせねばならぬ。而して吾人が文語口語の何れによつて最も正直に精確に思想を發表し得るかといふにそれは取りも直さず口語である。比較的學問の無いものが、文章が書けぬとか手紙が書けぬとかいつて筆を執ることを難んずるのは、文章といふものは文語でなければならぬ、手紙の文は候文でなければならぬと頭から教へられ又考へ込んで居るからである。此等の人でも口語で書かせたならば、大概は思ふ存分に書けるにきまつて居る。我が國に於て法律文や公文などは文語で書かねば威嚴が無いもののやうに考へられて居るのは、從來の固陋なる見解に誤られて居るものである。法律文や公文が文語で書かれるために上意は下に達せず、之がため犯罪人を多からしむる虞が無いとも限らぬ。近來我が國に於て國語整理の聲漸く高くなり、普通語は口語を以て基礎とせねばならぬといふ議論が勢力を占め、文部省

の如きは率先して願書、届書の口語文用例案を公にするが如き運動を見るに至つた。（『假名遣、國字、國語問題及ひ諺文研究』一、條参照）のは吾人の大いに欣快に堪へぬ所である。

國語を初め、朝鮮語、支那語の如き東洋の諸言語は何れも明かに文語、口語の區別を存して居るが、歐洲の諸言語にありては、此の間の間隔が極めて小さい。併し後者の場合に於て、口語が即ち文語、換言れば口語、文語の別が全然存しないやうに思ふ人があるかも知れぬが、實際に於ては紙に書く文體と口に載せる言ひ表はし方との間には多少の相違の存することを認めねばならぬのである。

東洋及び西
洋に於ける
文語、口語